

pro 脱落パラメータと SLA における ϕ 素性指定

石 野 尚

要 旨

生成文法理論におけるミニマリスト統語理論では、統語現象の派生を駆動するのは各語彙や機能範疇に内包される形式素性 (formal feature) であると考えられている。普遍文法に基づく第二言語 (L2) 習得理論研究の分野でも、ミニマリストの枠組みで、形式素性を用いて L2 習得現象を捉えようとする試みが、近年盛んに行われている (Hawkins and Chan 1997, Wakabayashi 1997, 2002, Lardiere 2008, Ishino 2012他)。本研究は、Ishino (2012) の素性転移／習得 (Feature Transfer/Feature Learning) 仮説 (以下、FTFL) における ϕ 素性の指定の構成という概念を用いて、空主語の容認性の L2 習得過程が適切に説明づけられることを論証する。

キーワード：パラメータ、 ϕ 素性指定、第二言語習得

0. 序

生成文法理論を基にした第二言語 (L2) 習得理論研究において、空主語の容認性の習得は最も盛んに研究されてきた統語現象の一つである。近年のミニマリスト統語論の枠組みでは、L2 習得とは対象言語の各語彙や機能範疇に内包される形式素性 (formal feature) の習得と考えられる (Hawkins and Chan 1997, Wakabayashi 1997, 2002, Lardiere 2008, Ishino 2012他)。標準的統語理論の仮定に基づけば、文の主語とは、主要部 T (Infl) の指定部に位置して主格を与値される DP を指すことから、本研究では、主語の統語的振る舞いに関する L2 習得とは、T が持つ ϕ 素性の一致の能力の習得に還元できると考える。より具体的には、日本語の T が多重指定部を認可すること (cf. Ura 1994, 1996) は、T の ϕ 素性の指定の構成に起因すると仮定する Ishino (2012) の素性転移／習得 (Feature Transfer/Feature Learning) 仮説 (以下、

FTFL) を用いることで、空主語の容認性の習得現象についても適切に説明できることを論証する。

本論文の構成は以下の通りである。まず、1節で、空主語の容認性の習得について pro 脱落パラメータを用いる従来の L2 文献における仮説の理論的不備を議論する。次に2節で、 ϕ 素性指定の構成の観点から、Ishino (2012) の FTFL 仮説を導入し、3節で、FTFL によって説明が可能となった日本語と英語の TP 及び DP 指定部の習得現象を詳しく観察する。そして4節で、空主語の容認性の L2 習得を FTFL で理論的に説明づけることを試み、当該仮説が指定部の習得に広く用いることができる仮説であることを検証する。最後に5節では、本研究の議論が今後どのような研究につながるのか、本研究の帰結についても述べる。

1. 空主語の習得についての先行研究：pro 脱落パラメータの観点から

空主語の容認性（即ち、定形節において主語が音的に非顕在になり得るかということ）については言語による差異が存在することが広く知られており、特に、日本語や中国語、スペイン語やイタリア語などでは（1）～（4）に示すように、空主語が容認され、これらはゼロ主語言語（null-subject language）とも呼ばれる。他方、英語やフランス語では（5）や（6）のように、空主語は容認されない。

(1) *Japanese*

(私は) 本を 買った。

(2) *Chinese*

Zhangsan shuo (ta) lai le. (Huang 1989)

Zhangsan say (he) come ASP

'Zhangsan said that he came.'

(3) *Spanish*

(Yo) hablo español bien.

(I) speak Spanish well

(4) *Italian*

(Lei) compra un libro.

(She) buys a book

(5) *English*

*(She) bought a book.

(6) *French*

* (Elle) parle français bien.

'She speaks French well'

空主語の容認性についての各言語の統語現象の違いは、Chomsky (1981) に基づき、従来の L2 研究では pro 脱落パラメータの値の違いに起因すると考えられてきた (White 1986, 1989他多数)。つまり、異なる 2 つの値 (空主語を容認する [+prodrop] というパラメータ値と空主語を容認しない [-prodrop] の値) があると考え、[-] が初期値として与えられており、[+] へのパラメータ値の (再) 設定は、その逆の場合と比べて容易であるという部分集合の原理 (cf. Berwick 1985) による説明づけがなされてきた。

例えば、Phinney (1987) は、スペイン語の母語 (L1) 話者で英語学習者 (Spanish Learners of English (SLsE)) と英語の L1 話者でスペイン語学習者 (English Learners of Spanish (ELsS)) の各 IL 文法における空主語の可否について報告している。スペイン語は空主語を容認する [+prodrop] という値をもつ言語で、英語は空主語を容認しない [-prodrop] という値をもつ言語である。従って、SLsE のパラメータ値の設定は困難だが、ELsS のパラメータ値の設定は容易であることが報告されている。このように、SLsE が英語では空主語が容認されないことを習得することは困難で、ELsS がスペイン語の空主語を習得することが容易であるという非対称性は、pro 脱落パラメータの 2 つの値を導入することで一見うまく説明づけられている。

しかし、Phinney (1987) の議論では SLsE の習得現象は説明できるが、[+prodrop] の値を持つ他の L1 話者による [-prodrop] の言語の習得は説明できない。つまり、スペイン語と同じように [+prodrop] の値をもち、空主語を容認する言語である日本語の L1 話者の英語学習者 (Japanese Learners of English (JLsE)) にとっては、英語の [-prodrop] という値の設定が容易であるという観察結果 (Boe 1996) は広く認められているにもかかわらず、その事実をとらえることができない。この事実に対しては、統語的パラメータを複数設定する (Huang 1984他) 方法などで解決できると考えられてきた。¹

1 Huang (1984) では、具体的には pro 脱落パラメータに加えて、談話本位についてのパラメータを仮定している。しかし、パラメータを複数設定する場合、L2 習得においてパラメータの再設定に難易度の差があると仮に認めたとして、その差とは何なのか、なぜ複数のパラメータの再設定が連動するのかといった概念上の問題が生じる。より詳しくは、Register (1990) を参照。本研究の立場としては、統語現象のパラメータ的差異の存在は認めるものの、それぞれの現象を決定づける「統語的なパラメータ」というものが言語の中に実際に存在しているという考えは、このような理論的な問題を多く含んでいることからして、本研究を通して否定している。

上記でみてきた通り、従来の L2 研究で広く用いられてきた考え方では、様々な統語現象の一つ一つに対して、その値を決定する統語的パラメータが存在すると仮定するため、空主語の習得についても同様に、pro 脱落パラメータが存在すると仮定し、そのパラメータ値の再設定や転移に基づくアプローチで説明を与えてきた。しかし、統語現象ごとに統語的パラメータという概念を設定するアプローチは、最小の道具立てで説明を行うことを目指すミニマリストの立場とは相いれない。では、統語的なパラメータを用いずに、どのように説明することが可能かという問題について、本研究では Ishino (2012) の仮説を用いて、T の各 ϕ 素性の指定の習得によって説明できることを示していくこととする。²

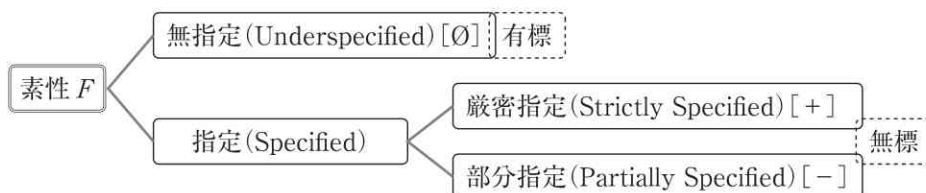
2. 素性転移／習得仮説 (Ishino (2012))

L2 理論研究では、L2 習得の段階には中間言語文法 (interlanguage grammar (cf. White 2003)) (IL 文法) と呼ばれる言語知識が現れていると考える。この IL 文法とは、L1 文法とも対象言語の文法とも異なるものであるが、誤りを含めて一定の規則を持った一つの言語体系と見做すことができる。IL 文法の体系はまだその全体像が明らかになったものではなく、今後も新たな現象を扱う研究が待たれるところであるため、まずは IL 文法の経験的な証拠を記述することが L2 研究の一つの大きな目標となっている。更に、Ishino (2012) では、IL 文法とは普遍文法によって与えられるものであるという考えに基づいており、L1 文法と対象言語の文法との組み合わせ (より正確には、形式素性の指定の組み合わせ) から演繹的に導き出すことができる、理想化した文法として IL 文法を扱っている。以下で、Ishino (2012) の素性転移／習得 (Feature Transfer/Feature Learning) 仮説 (以下、FTFL) を検証する。

まず、Ishino (2012) では、形式素性の指定についていくつかの定義を導入している。形式素性に強弱の 2 つの値を設定するのではなく、解釈に基づいて 3 分法の素性指定があると仮定しているのである。即ち、素性とは無指定 [\emptyset] (underspecified) と指定 (specified) に分けられ、指定素性は更に厳密指定 [+] (strictly specified) と部分指定 [-] (partially specified) に分けられると仮定する ((7) の図を参照)。

2 近年になって、形式素性の「値の強弱」を習得するという観点からの L2 研究が登場しており、そこでは、T の素性の強弱の値によって SLsE と JLSsE の IL 文法における主語の振る舞いを説明づけている。L1 日本語の T は弱い素性をもつ一方、L1 スペイン語の T は強い素性をもつため V から T への移動が起きる。他方 L1 英語の T は強い素性をもつが DP が VP 指定部から TP 指定部へ移動する。これらの違いにより SLsE と JLSsE の IL 文法が説明づけられることを議論している。より詳しくは、Wakabayashi (1997, 2002) を参照。

(7)



このように仮定する根拠として、各素性を以下のように定義する。まず、素性 F は無指定 (underspecified) と、指定 (specified) に二分され、更に、指定素性は厳密指定 (strictly specified) と部分指定 (partially specified) に二分される。 ϕ 素性の各指定の定義は、以下に示す通りで、まず、無指定は、(8) の通りである。

(8) ある言語 L 内において素性 F を持つ語彙がその形態的变化に関わらず、 F に関して任意に自由な解釈を容認する場合を無指定と定める。

次に、厳密指定は、(9) の通りである。

(9) ある言語 L 内において素性 F を持つ語彙がその形態的な違いごとに其々がただ1つの解釈のみを容認する場合を厳密指定と定める。

つまり、解釈の違いが形態的な違いによって決定され、更にその対応づけが一对一であれば厳密に指定されているととらえられるという考え方である。最後に、部分指定は、(10) の通りに定める。

(10) ある言語 L 内において素性 F が無指定でも厳密指定でもない場合 (つまり、解釈において何らかの指定を持つものの、形態的变化と F の解釈が一对一に対応づけられることもまた不可能である場合) を部分指定と定める。

これらの定義が具体的にはどのような現象をとらえているのかを以下でみていく。指定の具体例として、まず、語彙が持つ ϕ 素性を観察していく。 ϕ 素性とは、人称素性・性素性・数素性で構成されているが、例えば英語の場合、人称素性 (*person-feature*) は一人称 (1st person)、二人称 (2nd person)、三人称 (3rd person)、性素性 (*gender-feature*) は男性 (masculine)、女性 (feminine)、そして数素性 (*number-feature*) は単数 (singular)、複数 (plural) の各素性が組み合わせられている。

通常、DP は *Mary* が持つ ϕ 素性 [3rd, feminine, singular] や *the boys* が持つ ϕ 素性 [3rd, masculine, plural] のように、常に厳密指定であるわけだが、DP の中でも、 ϕ 素性が解釈において厳密に指定されていないものがあり、その一例が再帰代名詞である。具体的には、再帰代名詞の ϕ 素性指定の場合、(11a) に示す通り、「自分」は一人称でも二人称でも三人称でも指すことが可能であり、「自分」の人称素性は任意に自由な解釈を容認しているため無指定 (underspecified) と考えられる。

- (11) a. 私_jは／あなた_kは／ジョン_hは自分_{j/h/h}を責めた。
[person: underspecified]
- b. ジョン_jは／メアリ_kは彼自身_{j/*k}を責めた。
[gender: strictly specified]
- c. [ジョンとビル]_lは [*自分自身_l / ^{OK}自分達自身_l] を責めた。
- d. ^{OK}ジョン_jとビル_kは自分自身_{j@k}を責めた。
[number: partially specified]

次に、(11b) のように、「彼自身」は女性を指すことはできず男性の解釈しかないことから、「彼自身」の性素性は唯一の解釈を容認することから厳密指定とみなせる。また、数素性の場合、「自分自身」でみると、(11c) に示すように、「自分自身」は形態的には単数形であり、複数の主語（即ち、ジョンとビルの2人を指す解釈）とは一致できず、「自分達自身」という複数形を用いなければならない。このことから「自分自身」は数素性において任意に自由な解釈ができるわけではないことが分かり、「自分自身」の数素性が無指定でないことが分かる。では、厳密に一对一に対応づけられているかどうかを観察した時に、ある解釈において「ジョンとビル」という複数の主語と一致できることが分かる。つまり、(11d) に示すように、「ジョンとビル」という複数の主語と一致し、「ジョンがジョン自身を責めて、ビルはビル自身を責めた」という、いわゆる分配解釈も可能である。このような特徴をもつ数素性の指定は、無指定でも厳密指定でもないことから部分指定と考えられる。

FTFL において、素性の指定以外に導入される概念が learnability における有標性 (markedness) である。(7) の図に示した通り、無指定は有標に、そして、指定は無標に分類できる。FTFL の理論的に重要な点は、3つの素性指定を有標性に基づいて有標と無標の2つに分類できるという点である。

次に、(12) の表に示す通り、FTFL では IL 文法において2つの段階を規定している。つまり、IL 文法の初期から中期の段階においては、まず L1 の語彙や機能範疇の素性指定が IL 文法に転移されて用いられている。これを素性指定の転移 (Feature

Transfer (以下、FT)) と呼ぶ。(12) の表では (→) に図示されている。次に、習得がよりすすんだ上級者の IL 文法では、最初に転移した L1 の素性指定と対象言語の素性指定との組み合わせに対して、有標性に基づいて書き換えの可否が決定されると考え、書き換えられることを素性の移入 (Feature Learning (以下、FL)) と呼ぶ。(12) の表では (←) と図示している。

(12)

L1	IL 文法 初期～中期	IL 文法 中期～後期	対象言語	有標性
\emptyset	\emptyset	+/-	+/-	異
+/-	+/-	\emptyset	\emptyset	異
-	-	-	+	同

このように FTFL 仮説では、IL 文法の 2つの段階を設けており、正確な規定は以下の通りである。まず、Feature Transfer (FT) は、(13) に示すように、習得の初期段階においては、L1 の素性指定が IL 文法にそのまま転移されることだと規定する。

(13) 習得の初～中期では、対象言語の素性指定に関係なく、母語の素性指定が IL 文法に転移すると定める。

習得がよりすすんだ段階になると、(14) に示すように、Feature Learning (FL) が起きると考える。ここで重要になるのが素性指定の有標性である。

(14) 習得の中～後期では、転移した母語の素性指定と対象言語の素性指定が有標性に従って書き換えられると定める。このとき、有標性において異なれば、IL 文法において対象言語の素性指定への書き換えが可能である一方で、有標性が同じであれば、かなりの年限を経ても (つまり上級者でも) 対象言語の素性指定の獲得は困難である。

このように規定する FTFL の組み合わせの中で一番注目すべき点は、(12) の表においては下段のパターンで、L1 から転移した指定が部分指定 [-] で、対象言語の素性が厳密指定 [+] であれば、指定は異なっているにもかかわらず、有標性においては共に有標であることから、FL による指定の書き換えがおこらずに、L1 の指定が

IL 文法で更に習得がすすんでも保持され続けるという点である。³

上記規定をまとめると、FTFL において導入する概念は3種類の素性指定と有標性の2つだけである。そして、素性指定の組み合わせにおいて FT と FL を規定することで IL 文法を理論的に記述することを試みている。形式素性はミニマリストプログラムの枠組みでは様々な統語現象における派生や移動の駆動となっている。従って、習得現象においても、各種現象ごとにパラメータをややもすれば場当たりの作り出して用いるのではなく、素性に還元して説明づけていくことで、他の現象にも整合する説明が成立し得る。これこそが従来の L2 文献に対して FTFL が持つ理論的優位性なのである。

3. 多重指定部パラメータと素性指定

言語間のパラメータの中で最も広く議論されてきた現象のうちの一つに多重指定部の容認性が挙げられる。世界には、指定部を複数持つことができる（多重指定部を容認する）言語と1つの指定部しか容認しない言語が存在する。本研究で扱う空主語とは即ち、主要部 T (Infl) の指定部に音として顕在化した主語が現れないことであることから、空主語の習得について FTFL を検証する前に、複数の指定部の可否についての習得現象 (Ishino 2012) を以下で見ていくこととする。

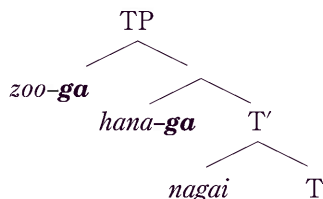
多重主格構文 (Multiple Nominative Construction (MNC)) 及び多重属格構文 (Multiple Genitive Construction (MGC)) の容認性に関しては、言語による差異が存在することが広く知られており、日本語は両構文を共に容認する。T (Infl) がその指定部に存在する DP の主格を、D がその指定部に存在する DP の属格を認可するという標準的統語理論の仮定に基づけば、日本語が MNC/MGC を容認するという事は、日本語の T 及び D が多重指定部を認可する能力を有すること (cf. Ura (1994, 1996)) を示し、その能力は主要部の ϕ 素性の構成に起因すると考えられる。他方、英語の T/D の ϕ 素性の構成は多重指定部を認可する構成ではなく、英語では両構文は容認されない。

日本語統語論では Kuroda (1965) 以来、L1 日本語では (15a) の MNC 及び (15b) の MGC は容認されることが広く認められている (cf. Fukui (1986) and Ura (1994)、

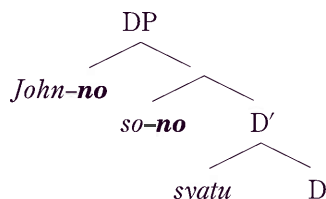
3 (12) の表の組み合わせでは L1 と対象言語の ϕ 素性が同じ指定の場合の記載を省略している。この場合、IL 文法で L1 の指定に変化が起きないことは当たり前のことと考えられるが、当然という主観的な説明ではなく、FTFL の定義に整合しているのである。つまり、まず L1 の素性指定が IL 文法に転移する (FT が起きる)。しかし、対象言語の指定とは有標性が同じなので、習得がすすんでも FTFL に則して指定の書き換え (FL) は生じない。結局これは、IL 文法では L1 の素性指定のままになっているという事実と整合する。

他多数)。⁴

- (15) a. ^{OK}[_{TP} Zoo-**ga** hana-**ga** [_{T'} naga-i T]] (koto)



- b. ^{OK}Mary-wa [_{DP} John-**no** so-**no** [_{D'} syatu D]]-o kat-ta.



一方で、例文 (15a, b) と対照すれば、L1 英語では (16a) の MNC や (16b) の MGC は共に容認されることが分かる。

- (16) a. *Elephants noses long.
 ('As for elephants, their noses are long.')
- b. *Mary bought the John's shirt.
 ('Mary bought the shirt for John.')

(15a, b) の樹形図に示した通り、L1 日本語の T/D は複数の格の与値が可能であることから複数の指定部をもっている。この能力について Ura (1994, 1996) では、主要部のもつ ϕ 素性が欠損していることに寄ると提案されている。本研究ではこの提案を更に推し進めて、複数の指定部をもつことができる主要部には、特定の ϕ 素性の指定があると仮定し、その ϕ 素性の指定の構成が空主語の容認可否についても決定づけているということを議論する。

次に、多重指定部の有無に関して日本語と英語のパラメータを言語習得の観点から

4 本論文では一般的仮定に従い、T/D は其々一つの節/名詞句に唯一存在することを前提としている。

分析する。まず、JLsE（英語の L2 習熟度は中級とみなせる日本人大学生の59名）に対して、英語の多重指定部の非容認性についてどの程度習得しているのかを確認するテストを行った。テストの方法は、(17) に示すような英語の MNC と (18) に示すような英語の MGC の例文に正文を混ぜたものを無作為に並べて、それらの文法性を判断するというテストを行った。

(17) MNC のテスト例

- a. *Elephants noses long.
(‘As for elephants, their noses are long.’)
- b. *John sister is pretty.
(‘John’s sister is pretty.’)
- c. *John sister hair is long.
(‘John’s sister’s hair is long.’)

(18) MGC のテスト例

- a. *Mary bought the John’s shirt.
(‘Mary bought the shirt for John.’)
- b. *I saw these Mary’s dogs.
(‘I saw these dogs that Mary has’)
- c. *I have Japan’s Toyota’s car.
(‘I have a Japanese car made by Toyota.’)

(19)

		MNC*		MGC**	
		容認 (%)	非容認 (%)	容認 (%)	非容認 (%)
JLsE	<i>n</i> = 59	9.3	90.7	81.1	18.9
コントロール ⁵	<i>n</i> = 20	0.0	100.0	20.0	80.0

Notes. *There is no statistically significant difference between the JLE group and the control group ($p > .05$). **There is a statistically significant difference between the JLE group and the control group ($t = 8.71$, $p < .01$).

表の (19) は Ishino (2012) で報告された JLsE 中級学習者の IL 文法における L2 英語の MNC/MGC の容認性を記述したものである。統計結果から明らかなように、MNC のテスト文については、JLsE はコントロール群と統計的な有意差はなく、

5 コントロール群は20名（男性11名、女性9名）、平均年齢19.4歳、英語圏から日本の大学に留学中の英語の L1 話者で日本語学習者（English Learners of Japanese (ELsJ)）である。

90.7% の JLsE は IL 文法で L2 英語の MNC を容認していないことから、L1 英語では MNC が不可能であることを正確に習得していると判断できる。一方で、MGC のテスト文については、L1 英語では MGC も不可能であることに関してはかなり不正確である。つまり、JLsE とコントロール群には有意差があり、81.1% の JLsE が IL 文法で L2 英語の MGC を容認しているという事実が明らかになった。

この観察結果についても、従来の L2 研究で広く用いられてきた統語的パラメータを設定するアプローチでは説明できない。つまり、多重指定部の容認可否に関して統語的なパラメータが存在すると仮定したとする。そして、仮に、多重指定部を許すパラメータ値を [+multiple]、許さない値を [-multiple] として、この2つの値をもっていると仮定する考えでは、JLsE が MNC については [+] から [-] へのパラメータ値の再設定が容易であるにもかかわらず、MGC についても同様に [+] から [-] へのパラメータ値の再設定であるにもかかわらず、MGC の L2 習得の場合は困難であるという事実をとらえることができない。多重指定部の習得について、統語的なパラメータという概念を用いずに、どのように説明するべきかという問題を次にとりあげていく。

そこで、Ishino (2012) では、日本語と英語の T/D の ϕ 素性を指定という概念を用いて分析している。T の一致による形態的变化は V に現れることから、V の屈折がない日本語の T は、(20) に示す通り、人称／性／数素性のすべての ϕ 素性が無指定である。

- (20) 私が／あなたが／彼がピアノを弾く [person: 1st/2nd/3rd, gender: masculine/feminine, number: sing/pl]
(こと)

一方で英語の T をみる場合、V の形態的变化は V- \emptyset と V-s の2種類があるが、(21a) に示す通り、V- \emptyset は一／二人称単複及び三人称複数を示すことから、英語の T は人称／数素性のみ部分指定である。つまり、一／二人称については単数と複数で形態が変わることはないものの、三人称においては単数と複数の場合で形態が異なっている。また、(21b) のように英語では男性と女性で V の形態が異なることはないため、性素性は無指定である。

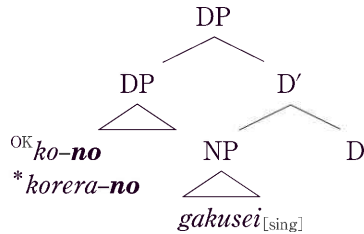
- (21) a. I/We/They/You (V- \emptyset) play [person: 1st/2nd/3rd(pl), gender: masculine/feminine, number: sing(1st/2nd)/pl] the piano.
b. He/She (V-s) plays [person: 3rd(sing), gender: masculine/feminine, number: sing(3rd)] the piano.

(22)

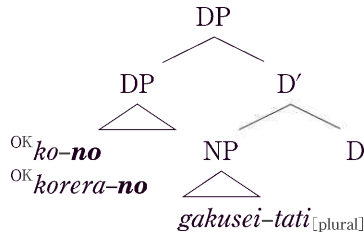
T の ϕ 素性指定の構成	日本語	英語
人称素性	\emptyset	-
性素性	\emptyset	\emptyset
数素性	\emptyset	-
多重指定部	<i>yes</i>	<i>no</i>

L1 日本語と L1 英語の T の ϕ 素性の各指定をまとめたものが表の (22) である。次に、DP の指定部に現れる DP と D の補部に位置する NP の一致による形態的变化をみていく。L1 日本語の D は補部に一／二人称を選択することはできず三人称のみに特定されていることから人称素性は厳密指定である。また性素性については男性／女性による差はないことから無指定である。数素性については、(23a, b) に示す通り、形態的に単数形の *kono* と複数形の *korerano* が存在する。(23a) と (23b) を比較して、複数形 *korerano* を指定部に持つ D は補部に複数形の NP [+plural] である *gakusei-tati* のみを選択する。一方で、単数形 *kono* を指定部に持つ D は補部の NP には単数でも複数でも選択が可能であることから、解釈において一対一に固定されているわけではなく、数素性は部分指定であることが導かれる。

(23) a. [_{DP} [_{DP} ^{OK}この／*これらの] [_{D'} [_{NP[-pl]} (1人の) 学生] D]]



b. [_{DP} [_{DP} ^{OK}この／^{OK}これらの] [_{D'} [_{NP[+pl]} (3人の) 学生達] D]]



更に、L1 英語の D については、L1 日本語と同様に、三人称のみに特定されている

ことから人称素性は厳密指定であり、性素性は無指定である。数素性については、(23a, b) と比べて、(24) に示す通り、単数形 *this* を指定部にもつ D は補部に単数形の NP [-p] である *student* のみを選択し、複数形 *these* は複数形の NP [+p] である *students* のみというただ 1 つの解釈を容認することから、数素性は厳密指定である。以上のように、L1 日本語と L1 英語の D の ϕ 素性の各指定をまとめたものが表の (25) である。

- (24) a. [_{DP} [_{DP} ^{OK}this / *these] [_{D'} D [_{NP[-p]} student]]]
 b. [_{DP} [_{DP} *this / ^{OK}these] [_{D'} D [_{NP[+p]} students]]]

(25)

D の ϕ 素性指定の構成	日本語	英語
人称素性	+	+
性素性	\emptyset	\emptyset
数素性	-	+
多重指定部	<i>yes</i>	<i>no</i>

いま、上記の通り確認した L1 日本語及び L1 英語の T/D の ϕ 素性に FTFL を適用してみる。T については、表の (26) の通り、JLsE の初期～中期の IL 文法では L1 日本語の T の各素性指定を転移 (Feature Transfer \longrightarrow) するが、習得が更にすすんで中期～後期の IL 文法では、人称／数素性は L1 日本語の指定と対象言語の英語の T の各素性指定とが有標性において異なるため、FTFL によれば、指定の書き換え (Feature Learning \longleftarrow) が起きる。

(26)

T	(L1) 日本語	JLsE の初期～中期 IL 文法	中期～後期 IL 文法	(対象言語) 英語
人称素性	\emptyset	\emptyset	-	-
性素性	\emptyset	\emptyset	\emptyset	\emptyset
数素性	\emptyset	\emptyset	-	-
多重指定部	<i>yes</i>	<i>yes</i>	<i>no</i>	<i>no</i>

表の (26) によれば、習得がすすんだ JLsE の T の ϕ 素性指定は、人称／数素性は対象言語の T から、性素性は母語の T から得て合成的に $\{-, \emptyset, -\}$ となる。これは多重指定部を容認しない素性構成であることから、表の (19) で確認した、JLsE は英語の MNC を容認しないという観察結果に整合する。

D については、表の (27) の通り JLsE の初期～中期の IL 文法では L1 の D の各

素性指定を転移 (→) するが、上級に達しても L1 の D の数素性と対象言語の英語の D の数素性は共に有標性において同値であるため、指定の書き換え (←) は起きない。従って、JLsE の上級学習者の IL 文法における D の ϕ 素性指定は、{+, \emptyset , -} となり、これは多重指定部を容認する素性構成となる。言い換えれば、上級者にとっても、英語が MGC を容認しないことを正しく習得することは困難である。これは、表の (19) で確認した観察結果の、JLsE は英語の MGC を誤って容認し続けるという事実に整合している。

(27)

D	(L1) 日本語	JLsE の初期～中期 IL 文法	中期～後期 IL 文法	(対象言語) 英語
人称素性	+ →	+	→ +	+
性素性	\emptyset →	\emptyset	→ \emptyset	\emptyset
数素性	- →	-	→ \ominus	+
多重指定部	yes	yes	yes	no

以上の通り、FTFL 仮説に基づいて素性指定という概念を用いることによって、JLsE の多重指定部の容認性についての習得現象を説明づけられた。⁶

4. IL 文法における空主語の統語的特徴： ϕ 素性指定の観点から

FTFL では、ミニマリストプログラムの枠組みで、言語の習得とは各語彙や機能範疇そのものの習得ではなく、更にはその要素の持つ統語的なパラメータの値の習得でもなく、素性指定の転移と習得であると規定している。従来の L2 文献では主に統語的なパラメータの存在を肯定していき、形態的均一性原理 (morphological uniformity principle) (cf. Jaeggli and Safir (1989)) に基づいて空主語を容認する言語がもつパラメータを [+uniform] とし、空主語を禁止する言語は [-uniform] という値をもっていると仮定していた。[+uniform] という値をもつ言語とは、動詞の語尾活用 (屈折) が豊かで、主語の人称/数の形態的变化によって動詞の屈折が均一的 (uniform) な言語のことである。そのような言語には (28) のようなスペイン語や (29) のようなイタリア語などが挙げられる。

6 FTFL 仮説に基づけば、ELsJ の IL 文法において、習得の初期の段階では日本語の MNC は誤って容認しないが、習得後期では正確に MNC を容認できるようになると予測できる一方で、MGC については習得がかなりすすんでも容認できないという予測がたてられる。これらの予測が事実と整合することは確認されている。詳しくは Ishino (2012) を参照。

(28) *Spanish*⁷

1sg	yo	hablo
2sg	tú	hablas
3sg	el	habla
1pl	nosotros	hablamos
2pl	vosotros	habláis
3pl	ellos	hablan

(29) *Italian*

1sg	io	parlo
2sg	tu	parli
3sg	lei	parla
1pl	noi	parliamo
2pl	voi	parlate
3pl	loro	parlano

(cf. *English*)

1sg	I	speak
2sg	you	speak
3sg	he/she	speaks
1pl	we	speak
2pl	you	speak
3pl	they	speak

一方で日本語や中国語などでは動詞の活用に主語の人称／性／数の一致は必要とせず、すべての動詞は同じ活用であることから、これらの言語も (28) や (29) のように動詞の屈折が均一的とみなすことができ、[+uniform] の値をもっていると分類している。

そして、空主語を容認しない英語などの言語は [-uniform] という値を持つとみなす。この議論を L2 研究にあてはめるとすれば、スペイン語 L1 話者の英語学習者 (SLsE) にとって英語では主語が義務的であることを習得することと、JLsE が英語の主語が義務的であることを習得することには、どちらもパラメータの[+]から[-]への再設定であり、英語で空主語が不可能であることを習得することの困難さは同程度である、としか予測しない。しかし実際には、SLsE の IL 文法と JLsE の IL 文法とでは空主語の振る舞いが異なることが報告されている (cf. Boe 1996)。

Boe (1996) では、27名の SLsE と 83名の JLsE に対して主語を脱落させた英語の文を提示し文法性を判断させるテストを行っている。主語がない非文法的な英語の文を非文と判断できたかどうかという点において、SLsE は JLsE と比較して正答率が低いことが報告されている。つまり JLsE は SLsE に比べて英語の空主語が容認されないことを正確に習得していると結論している。以下ではこの Boe (1996) の観察結

7 スペイン語では、他に -er, -ir の規則動詞があるが、これらも -ar 動詞と同様に 6 種類の活用をもっている。

果に対して素性指定の観点から分析を与えることとする。まず、Tの各 ϕ 素性の指定については(22)の表にスペイン語の ϕ 素性の指定を追加し、更に各言語の空主語の可否についての情報を追加し、(30)の表の通りとする。

(30)

Tの ϕ 素性指定の構成	日本語	英語	スペイン語
人称素性	\emptyset	-	+
性素性	\emptyset	\emptyset	\emptyset
数素性	\emptyset	-	+
多重指定部	<i>yes</i>	<i>no</i>	<i>no</i>
空主語	<i>yes</i>	<i>no</i>	<i>yes</i>

スペイン語のVの屈折は(28)で見た通り、人称と数による語尾変化は6種類ある。つまり、一人称単数／二人称単数／三人称単数と一人称複数／二人称複数／三人称複数の6種類があり、その形態的違いと解釈は一对一に厳密に対応づけられることから、(30)の表に示す通り、人称素性は厳密指定、数素性も厳密指定とみなせる。また、スペイン語では男性と女性でVの形態が異なることはないため性素性に関しては、無指定である。従って、L1スペイン語のTの ϕ 素性の指定は $\{+, \emptyset, +\}$ の組み合わせとなる。⁸

では次に、(30)の表で確認したL1日本語、L1英語、L1スペイン語のTの ϕ 素性にFTFLを適用してみる。(31)の表に示すように、JLsEの初期～中期のIL文法では、L1日本語の各指定を転移し、空主語を容認しているが、その後、習得がすすむと、L1英語のTの人称素性と数素性とは有標性が異なるために、指定の書き換えがおきる。その結果、JLsEのIL文法でのL2英語のTは $\{-, \emptyset, -\}$ の組み合わせとなり、この構成は空主語を容認しない。これにより、JLsEは英語では空主語が容認されないことを比較的早い段階で正確に習得できるという予測ができることになるが、この予測はBoe(1996)で報告された事実と整合している。

8 なお、この $\{+, \emptyset, +\}$ の組み合わせは(25)でみた通り、L1英語のDの ϕ 素性の構成と一致する。この指定は多重指定部を容認しない組み合わせであったことから、L1スペイン語はTの多重指定部を容認しない言語であることが導き出せるが、この予測は事実と整合している。

(31)

T	(L1) 日本語	JLsE の初期～中期 IL 文法	中期～後期 IL 文法	(対象言語) 英語
人称素性	\emptyset →	\emptyset	— ←	—
性素性	\emptyset →	\emptyset →	\emptyset	\emptyset
数素性	\emptyset →	\emptyset	— ←	—
空主語	<i>yes</i>	<i>yes</i>	<i>no</i>	<i>no</i>

また、(32) の表は、SLsE の IL 文法を予測したものであるが、まず、SLsE の初期～中期段階では L1 スペイン語の各指定を転移し、空主語を容認している。その後習得がすすんでも、L1 英語の T の人称素性と数素性とは有標性が同じであるために、指定の書き換えがおきず、SLsE の IL 文法での L2 英語の T は $\{+, \emptyset, +\}$ の組み合わせとなることを予測する。この組み合わせは空主語を容認する指定であるため、SLsE は JLsE と比べて、IL 文法で英語の空主語を誤って容認し続けることが予測されるが、このこともやはり Boe (1996) で既に報告されている事実に整合している。

(32)

T	(L1) スペイン語	SLsE の初期～中期 IL 文法	中期～後期 IL 文法	(対象言語) 英語
人称素性	+ →	+	+ →	—
性素性	\emptyset →	\emptyset	\emptyset →	\emptyset
数素性	+ →	+	+ →	—
空主語	<i>yes</i>	<i>yes</i>	<i>yes</i>	<i>no</i>

以上みてきた通り、英語では空主語が容認されないということを習得することにおいて、JLsE と SLsE の間で習得過程の違いがあることに関しては、FTFL 仮説を用いることで、困難さの程度の差を説明づけることができた。

5. 結

L2 習得理論研究において、IL 文法とは習得のレベルに即して変化する、可変性／流動性 (variability) のある言語知識であると認められている。また、IL 文法が流動性を失ってしまう現象、つまり、ある統語現象において未だ習得できていないままで留まる (つまり、誤りが固定してしまう) 現象を化石化 (fossilization) と定義している。IL 文法を素性の習得によって分析することを目指す FTFL において、化石化

はどのようにとらえなおすことができるだろうか。⁹

FTFL では、ある統語現象の習得の困難さとは、素性の指定の習得の困難さに起因するととらえるため、化石化とは即ち指定の書き換えの困難さと言えるであろう。FTFL においては3つの指定が有標性という2つの分類に基づくことで、書き換えの困難さを説明づけている。そしてIL 文法の段階を初期～中期と中期～後期という2段階としてとらえている。このように考えると、指定が異なっても有標性が同じ場合、書き換えが困難となり、習得の後期という段階においても書き換えは起こらないと理論上は説明づけられる。しかし、実際に、上級学習者においても習得が困難で、かつ、最終的に習得ができない状態に至る（つまり化石化が起きる）こともあれば、母語話者に非常に近い体系のIL 文法を使用している学習者もいることもまた事実である。この研究ではIL 文法を記述することだけが目標ではないとはいえ、経験的な事実も重要であることから、有標性が同じであれば指定の書き換えとは最終的に起きないものと結論できるのか、また、IL 文法を2段階とすることが適切か、といった点に関しては、FTFL を更に検証することが必要であり、それについては今後の研究に委ねたい。

また、本研究の帰結としては、経験的には、 ϕ 素性の指定構成とその指定部の振る舞いととの関係のみていることから、今後は ϕ 素性の指定構成とその他の統語現象との関連を探ることや、T や D 以外にも ϕ 素性をもつと考えられている v の指定部の統語的振る舞いを対象とすること、そして更には、素性の指定という観点からは ϕ 素性以外の素性を分析することが、今後の研究の方向性だと考えられる。

普遍文法に基づいた第二言語習得理論研究の枠組みにおいて本研究の目指すところは、IL 文法とは、L1 と対象言語の語彙及び機能範疇の形式素性の指定の転移と習得であり、その言語知識は理論的に予測できるものだと主張することである。そのため、IL 文法とは単に習得途上の誤りを記述して一般化するものではなく、理論的に予測可能な文法体系と考える。このような考えに基づき、本研究では、既にL2 文献で広く認められている空主語の振る舞いについての観察結果に対して、習得途上の語彙／範疇の ϕ 素性は、L1 からの転移と対象言語からの習得によって合成的に形成されていると主張する FTFL を用いて、その予測が経験的に整合することを示し、FTFL の正則性を論証した。

9 各素性の組み合わせ（'feature assembly'）の失敗だととらえることができるという議論については、詳しくは、Lardiere (2008) を参照。

References

- Berwick, Robert C. 1985. *The Acquisition of Syntactic Knowledge*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Boe, David R. 1996. *Parameter Resetting in Adult Second Language Acquisition: Inflectional Richness and The Null Subject Parameter*. Ph. D. dissertation, Indiana University.
- Burzio, Luigi. 1991. The Morphological Basis of Anaphora. *Journal of Linguistics* 27: 81-105.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Fukui, Naoki. 1986. *A Theory of Category Projection and Its Applications*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Gair, J. W. 1988. Kinds of Markedness. In: Suzanne Flynn and Wayne O'Neil (eds.), *Linguistic Theory in Second Language Acquisition*, 225-250. Dordrecht: Kluwer.
- Hawkins, Roger. and Cecilia Yuet-hung Chan. 1997. The Partial Availability of Universal Grammar in Second Language Acquisition: The 'Failed Functional Features Hypothesis'. *Second Language Research* 13, 187-226.
- Huang, C. T. James. 1984. On the Distribution and Reference of Empty Pronouns. *Linguistic Inquiry*. 15, 531-574.
- Huang, C. T. James. 1989. Pro-drop in Chinese: A Generalized Control Theory. In: Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds), *The Null Subject Parameter*. Dordrecht: Kluwer, 185-214.
- Ishino, Nao. 2012. *Feature Transfer and Feature Learning in Universal Grammar: A Comparative Study of the Syntactic Mechanism for Second Language Acquisition*, Doctoral dissertation, Kwansei Gakuin University.
- Jaeggli, Osvaldo and Kenneth J. Safir. 1989. The Null Subject Parameter and Parametric Theory. In: Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds), *The Null Subject Parameter*. Dordrecht: Kluwer, 1-44.
- Kuroda, Sige-Yuki. 1965. *Generative Grammatical Studies in The Japanese Language*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Lardiere, Donna. 2008. Feature Assembly in Second Language Acquisition. In: Juana M. Liceras, Helmut Zobl, and Helen Goodluck (eds.), *The Role of Formal Features in Second Language Acquisition*, 106-40. New York: Laurence Erlbaum Associates.
- Phinney, Marianne. 1987. The Prodrop Parameter in Second Language Acquisition. In: Thomas Roeper and Edwin Williams (eds.), *Parameter Setting*. Dordrecht: Reidel. 221-238.
- Register, N. 1990. Influences of Typological Parameters on L2 Learner's Judgments of Null Pronouns in English. *Language Learning* 40, 369-385.
- Ura, Hiroyuki. 1994. *Varieties of Raising and The Feature-based Bare Phrase Structure Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics 7. Cambridge, Mass.: MITWPL.
- Ura, Hiroyuki. 1996. *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Wakabayashi, Shigenori. 1997. The Acquisition of Functional Categories by Learners of

English. Ph.D. dissertation, University of Cambridge.

Wakabayashi, Shigenori. 2002. The Acquisition of Non-Null Subjects in English: A Minimalist Account. *Second Language Research* 18, 28-71.

White, Lydia. 1986. Markedness and Parameter Setting: Some Implications for A Theory of Adult Second Language Acquisition. In: Fred R. Eckman, Edith A. Moravcsik, and Jessica R. Wirth (eds.), *Markedness*, 309-328. Springer.

White, Lydia. 1989. *Universal Grammar and Second Language Acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.

White, Lydia. 2003. *Second Language Acquisition and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.